
クレイズ・リレイション

シャルロッテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレイズ・リレイション

【Nコード】

N7184V

【作者名】

シャルロッテ

【あらすじ】

その少女は、異常だった。かの有名な本名不明の戯言遣いに成り代わった少女は、ある日D・Graymanのアレンに成り代わる。世界を恨み、自分を呪う少女は、エクソシストになることに。そして少女は、アレン・ウォーカーとして生きることを決意する。これは、歪み、狂い、全てが嘘で包まれた少女の、狂ってしまった物語。

終焉（終演）

いるようでいない、いないようである。

そんな人間は、その人間関係すら狂っているのかもしれない。

これは、とある少女の独白：もとい、独り言。

「つていうか、そもそも僕は存在自体が異常なんだよね。いつも周りにいるのは変人ばかりだし、もしかして類は友を呼ぶとか？：よそう、ホントに洒落にならない。どうして、っていつでも答えなんかないし、これからも存在しないに決まってる。結局、これら全てが戯言、なんだよなあ。ねえ鏡、僕はどうして戯言遣いとして存在しているんだろうね、こんな***とかいう記号に近い名前持って生きてる意味が分からない。というかこれじゃ只のトチ狂った人間じゃないか、全く戯言だね。こんなだから、殺人鬼とかの知り合いが出来るんだ」

まあ、それら全ても戯言だけれど。

そう言った少女は、自らの左胸を見る。

急所からは外れているとはいえ、溢れている血の量は、いつ出血多量で死んでもおかしくない。

それでも少女は、目を背けず、目を閉じなかった。

少女は、世界から愛されていた。
否。

表世界からは嫌われ、財力の世界・政治力の世界・そして暴力の世界から愛されていた。

だからこそ、少女は異常だった。

逆に言えば、少女が異常だったからこそ、裏世界から愛されたのだ。

世界に愛され、世界に嫌われ、そして自分を生み出した世界を恨む。あまりにも、異常すぎていた。

戯言遣い。

特に暴力の世界からは、狂愛ともいえる感情を向けられている少女。本名を名乗ったことは三度しかない。

そんな少女を一言で表すならば、どう考えても「異常」である。というより、それ以外の表現は不可能に近い。それが、彼女だった。

さて、現実逃避はそれぐらいに。

今少女が死にかけているのには、勿論理由がある。簡単に言えば、逆恨みである。

少女の知り合い、請負人・哀川潤の所為で。

彼女の依頼に付き添ったが為、裏社会のマフィアに逆恨みされたのだ。

「（まあ、どうでも言いけど）……戯言、だ」

裏社会を認識していなかったことが、逆に命取りになった。

それだけ、少女は無関心だった。

そう、自分自身にすらも。

結局、少女は。

このまま息を引き取ることになる。

かの有名な「戯言シリーズ」の「ぼく」になった自分のことを恨みながら。

そんな運命を与えた神を恨みながら。

最後に、戯言遣いとしての独白を残し。

少女の世界は、暗転した。

プロフィール

主人公設定

名前…アリーチェ・ウォーカー

性別…女

身長…151cm

容姿…髪は長髪で、うなじ辺りで一つに纏めている。

ただし、一定の条件が揃った時のみ右耳の上あたりで一つに括る。

白髪ではなく銀髪になった。

目の色は普段は両方とも銀灰色で、左目が赤く（哀川潤に気に入られた）なった時は、右目のみ銀灰色。

ただし、戯言遣いとしている時は、右目は濁った黒になる。

勿論ペンタクルもある。

リミッターを外すと……？

性格…基本的に無関心。

但しこれは本当の性格ではなく、実際は……。

教団では性格を偽っているし、本当の性格は戯言キャラしか知らない。

つまりクロスやマナも知らない。

ただし、神田・ラビ・リナリー・コムイ・クロス・ミランダ・クロウリー、そして何故かロードにだけは若干ながらも心を開いている様子。

怒ると哀川潤すらも凌駕する。

備考.. 戯言遣いとアレンに成り代わった少女。

裏世界では“人類最愛”“破壊人”^{クラッシュヤー}という異名だった。

哀川潤よりも強いが、それを制御する術をもたない。

よって普段は封じており、弱くなっている。

教団では男装しており、クロスが来た時点でもう既に男装していた。

普段はアレン・ウオーカーと名乗っている。

実は哀川潤と闇口濡衣（電話越しに聞いた）しか知らない秘密が…？

プロフィール（後書き）

未だに分からない部分はネタバレとなるので本編で徐々に明かしていきます。

ヒントが時々出てくるので、それを元に推測するのもあります。知らなくても本編には影響ありません。

必要な部分だけは記載していくつもりなので。

教団本部（前書き）

いきなり飛びますが、作者の都合です。
気にしないで下さい。

教団本部

三ヶ月前 インド某所にて

「アレンよ」

そういつてアリーチェことアレンに話しかけるクロス。
対するアリーチェは……船を漕いでいた。

それに嘆息すると、クロスはタイムキャンピーに録音することにしたらしい。

勝手に一人で話し始めた。

「お前が俺の助手になってもう3年。そろそろお前も一人前になってきた頃だ……。今日から正式にエクソシストを名乗ることを許す」

そこでクロスは一息つくど、続きを口にした。

それと同時に、アリーチェの目が覚める。

「だがそのためには俺と共に本部へ挨拶に行かねばならん。お前……本部の場所は知ってるよな？」

目を開けたアリーチェの視界には、トンカチを持ったクロスの姿。それだけで、状況を何となく察した。

「俺のゴーレムを代わりに置いてってやる。コムイという幹部にも紹介状を送っというてやるから……目が覚めたら出発しろ」

流石のアリーチェも後ずさりする。

こんな性格でも戯言遣い、自分の命は惜しいのである。

「俺、本部あそこキライなんだよ」

クロスのような台詞と共に、トンカチがアリーチェの頭に向かって思い切り振り下ろされた。

所変わって教団本部付近。

アリーチェは今、必死で崖をよじ登っていた。

「（くそう、これも全部クソ師匠のせいだ！）……………まったくもって、戯言、だ！！」

その言葉と同時に、頂上へと到達する。
見上げると、そこには教団本部があった。

「これが教団本部…。どちらかというとラスボスのアジトだろコレ」

ま、戯言だけどね。

そう呟くと、アリーチェは立ち上がった。

数々の蝙蝠が飛び回り、切り崩された崖の上。

なおかつその建物自体が不気味さを放っている。

哀川潤が見たら喜び勇んで突入しそうだ。

先ほどの台詞をかの狐面の男が聞いたらさぞかし嘆くだろうが、いまの彼女にそれは関係ない。

思い切りスルーしながら扉への道を急いだ。

一方その頃。

コムイ達科学班は、外の蝙蝠型のゴーレムを通してアリーチェを観察していた。

「なんだいこの子は！？ダメだよ部外者入れちゃあゝゝゝ。なんで落とさなかったの！？」

コムイが他の人に非難の声を浴びせる。

それを聞いたうちの一人が、心外だともいわんばかりの声をあげた。

「あ、コムイ室長。それが、微妙に部外者っぽくねーんスよね」

そういった男————リーバーの声を受け、リナリーが映像を覗き込む。

そして、何かに気付いたかのような声を出した。

「ここ見て兄さん。この子クロス元帥のゴーレム連れてるのよ」

教団への紹介状（前書き）

今回はアリーチェ視点です。

教団への紹介状

どうも、戯言遣い15歳です。

気が付いたらD・Graymanのアレンに成り代わってました。
……何て現実逃避はやめよう。

実際は、戯言遣いに成り代わった14歳です。

まあ兎に角、僕はこうやって転生&成り代わりを繰り返してる。

僕↓戯言遣い↓アレンみたいな感じにね。

というか戯言遣いに転生してから、自分の世界が漫画とアニメにな
っていたから驚いたけど……まあ、それは置いといて。

一人称も変わったんだよね、前はあたしだったんだけど。

辛いけどもう慣れた。

ちなみに名前は***っていうのが……井伊友乃。

もう言っても誰も死なないらしい。

殺意があるなら発動するっぽいけど。

だから裏世界の人に会えたら今度こそ名前でもらいたい。
無理だろうけど。

だって、あの世界の原作は捻じ曲がっている。

否、僕が捻じ曲げたのだ。

だからこそ、本来死ぬべきではない自分がその代わりに死んだ。

本来なら少なくとも八年後までは生きているものを————二年
後までしか生きなかった。

自分で望んで迎えたその結果だけ。

少しだけ……ほんの少しだけ、寂しく思った。

折角、大切な仲間が出来たのに。

折角、全てを受け入れてくれる友達が出来たのに。

その全てを、僕は自ら壊したのだ。
あたし

こんな懺悔、人間失格が聞いたら笑いそう。

でも、それすら許されない。
もう、二度と会えないから。

そこまで考えて、首を振る。

とりあえず、今は教団に入ることを考えよう。

無駄なことを考えてると、この後の神田ユウ戦に響く。

無心、無心。

そう暗示をかけていると、いつの間にか門の前。

間近で見るとやっぱり怪しきMAXだけ……仕方ない。

僕は、声を張り上げた。

「すみませーん。クロス・マリアン神父の紹介で来たアレン・ウォーカーです。一応、紹介状が来てる筈です。教団の幹部の方に謁見したいのですが……」

念の為、紹介状の件も言っておく。

あ、でもやっぱり痛いのは嫌だ。

「あと、コムイという人ならきつと、机の中に埋もれてるだろうとも言っていました」

一応、一応。

これでも命は惜しいんだよ。

確かに目は閉じないけど。

それとこれとは別問題。

あ、何かゴーレム越しに音がガサゴソと。

探してるのか？

《あつた！ありましたあ！！クロス元帥からの手紙です！》
《読んで！》

聞こえた会話はここまで。

：何かあつたのだろうか、静寂が続いている。

しばらく経過。

次の瞬間、急にコムイさんが大声をあげた。

《リーバー班長、急いで神田君のこと止めて！ボクがクロス元帥に
殺される！！》

…え？

神田ユウってこっちに来てたの？

どんだけ用意周到なの！？

門番の検査すら受けてないのに！？

「か、開門んん？」

あ、扉開いた。

まあいっか、気にしないで。

ちなみに。

一方その頃科学班部屋。

「兄さん、その手紙、何て書いてあつたの？」

そういつてリナリーが手紙を手取る。

『コムイへ

近々俺の可愛い可愛（r y弟子のアレンをそっちに送るのでヨロシクな

b yクロス』

沈黙が部屋を支配した。

教団への紹介状（後書き）

一人称で、分かる人は分かるかもしれませんが。
ヒント…マミさん（生意気ルーキーは魔法少女！？）の前世と同じ
世界です。
ちなみに、イノセンスはもうひとつあります。

i n 黒の教団 (前書き)

後半ちょっとシリアス入ります。

i n 黒の教団

扉に入った僕を出迎えたのは東洋系の顔をしたツインテールの少女だった。

名前は…あれ、何だっけ。

おかしいな、原作で読んだ筈だったのに。

やっぱり対人記憶力は低いみたいだ。

ヒロインの名前すら思い出せないだなんて。

神田の名前は分かったのに。

「初めまして、私は室長助手のリナリー・リーよ。よろしくね」

そういつて笑う目の前の少女。

うん、確かコムイ室長の妹だったと思う。

よく思い出した、自分。

そういえば、師匠が前に本部に可愛い女の子がいるって言ってたっけ。

あれリナリーのことだったんだ。

…どうでもいいけど。

「あ、アレン・ウォーカーです。こちらこそ、よろしく願いします」

腰を90度に曲げて挨拶。

先輩にはきちんと挨拶を、これ基本。

苦笑しているみたいだけれど、気にしない。

「それじゃあ、室長の所まで案内するね」

そう言って歩き出したりナリー。
僕は慌てて追いかけた。

食堂、修練場、談話室。

ここは随分と設備が整っているみたいだ。
迷いそうだけど。

「他にも療養所や図書室、各自の部屋もあるから、後で案内するね」
「部屋が与えられるんですか!？」

これは本気で驚いた。

だって……ねえ？

今までじゃ野宿も当たり前だったから尚更…。

やめよう、空しくなってきた。

こういうことは考えないに限る、うん。

「エクソシストは皆、ここから任務へ向かうの。だから本部のことを“ホーム”って呼ぶ人もいるわ。出ていったきりわざと帰ってこない人もいるけど」

…すみません、それ師匠です。

それ絶対師匠です！

うわぁ……。。

そんなこんなで歩いていると、新しい階に着く。

「あの、このフロアには一体どんな部屋が……?」

「あ、ここはいいの」

「え?」

「いいの」

あまりの迫力に何も言えなくなったことを許して欲しい。
確かここはコムイの実験室のある部屋だった気がする。

…成る程、それが理由か。

確かにあまり関わりたくはない。

アニメでもテーマ曲がアレだからな……。

見なかったことにしよう。

そして、室長さんのいる所に着いた。

「はい、どーもお！科学班室長の、コムイ・リーでえす！！」

思わず殴りたくなった僕を許してほしい。

潤さんに漫画とアニメを見せられて知ってはいたが、まさかここまでとは。

うん、よく我慢した、僕。

「歓迎するよ、アレンくん。いやあー、それにしてもさっきは大変だったねー」

「「「誰のせいだ！！」」」

科学班一同、魂からの叫び。

同意せざるをえない。

ご愁傷様です、科学班の皆さん。

ん？どうして神田が来なかったのに大変だったかって？

門番が後で煩かったんだよ、滅茶苦茶。

だってさ、だってさ。

師匠の弟子って分かってるのに、ペンタクル見た瞬間に悲鳴上げるんだよ？

酷いにも程があるだろ。

「あ、そうだ。イノセンス発動できる？」

「あ、はい」

そう答えながらイノセンスを発動する。

でも何でだ？

原作みたくな怪我はしてないんだけど。

「ふーん、君は寄生型みたいだね」

あ、そっか。

そういえば原作アレンは寄生型とか装備型とか知らないんだっけ。
師匠も説明しなかったし。

そんなことを思いながら、寄生型？と首を傾げてみせる。

変な所でボロが出たらマズイし、何より……忘れた。

説明長くて細かい所忘れたんだよ。

仕方ないでしょ、記憶力悪いんだから。

「うん、人体を武器化する適合者のこと。数ある対アクマ武器の中で最も珍しい型だよ。寄生型の適合者は肉体が武器と同調してる分、その影響を受けやすいんだよね」

コムイさんの説明を聞きながら、ふと感じたこと。

僕は、前世ではこんなに楽しいと思っただことはあっただろうか。
前々世の時はそうだったけれど、少なくとも前世では無かったんじゃないかな。

勿論、大切なものはあった。

友も真心も潤さんも、姫ちゃんも崩子ちゃんも萌太くんも欠陥製品も玉藻ちゃんも子荻ちゃんも出夢くんも理澄ちゃんもみいこさんも七々見も。

ここでは挙げなかった裏世界や骨董アパートの人や大学の友達も、みんなみんな大好きだった。

でも、^{あたし}僕は戯言遣いだから。

***であり、そして——×××××だから。

それを言うことは、許されなかった。

許される訳が、無かったんだ。

ごめん、——。

あたしは、あんたに言ったことすら守れてないや。

後悔だけは、絶対にしないって……そう言った筈なのに。

ごめん、ごめんね。

でも、あと少しだけ。

あと少しだけ、待ってて欲しい。

きつと、きつと……今度こそ、自分の大切なものを守り抜いてみせるから。

アレン・ウォーカーみたいに、なるもんか。

僕は——あたしは、アリーチェ・ウォーカー……×××××なんだ。

絶対に、後悔だけはしたくない。

もうあんな間違いはしない。

だから、見えていて。

これが終わったら、あんたのトコに行くからさ。

だから……あともう少しだけ待ってね、――。

i n 黒の教団（後書き）

はいもう主人公の正体分かりますよねー。

後悔だけは絶対にしないとか…名台詞じゃん。

一発で分かるじゃん。

しかも……とか伏せても主人公の正体の所為で丸分かりじゃん。
バラすの異様に早いな自分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7184v/>

クレイズ・リレイション

2011年9月12日18時30分発行